

242 ^{かすみ}霞17号墳

— 陰陽交通路の要衝に立地する前方後円墳 —

所在地

日野郡日南町霞

立地

日野川上流域で最も広い低地となる生山地区を見下ろす丘陵先端部に立地する。

時期

古墳時代中期初頭

発見と調査

国道183号線バイパス建設工事に伴って、2000年（平成12）に調査された（文献3）。

遺跡の種類

前方後円墳。

遺構と遺物

平面形は全長19.6m、後円部径12m、前方部幅6.7mの小型の前方後円墳であるが、高さも最大で約2mと極めて低平な点に特徴がある。盛土は最大でも1mほどである。河原石のような円礫を使用した葺石を施すが、埴輪は存在しない（図1）。

後円部の中心に竪穴式石室1基、箱式石棺2基が営まれている。また、墳丘上や墳丘周辺に配石土坑と名付けられた遺構があり、土坑の上面に複数の礫を重ね置く。配石土坑1は箱式石棺状に石材を組んでいるため、古墳時代の埋葬施設の可能性もあるが、いずれも葺石の石材を抜き取って構築された可能性があり、墳丘上で奈良時代の遺物の散布も認められることから、古墳時代よりも後の遺構と考える余地もある。

竪穴式石室は、内法長さ3.5m、幅0.75m、高さ0.7mを測り、石材表面には赤色顔料（ベンガラ）が塗布されていた（図2-左）。墳頂部から盛土を掘り込んだ墓壙内に石室が構築されているが、側壁は控え積みがほとんどない場所もあり、石材を単純に小口積みした簡易な構造である。そのためか、調査時には北側側壁の中央部が内部に崩落していた。

墓壙底部は地山に達しており、石室の構築面は地山を削り出した水平面にある。墓壙底中央部は、細長く掘り窪められた部分があり、木棺が設置された可能性も考

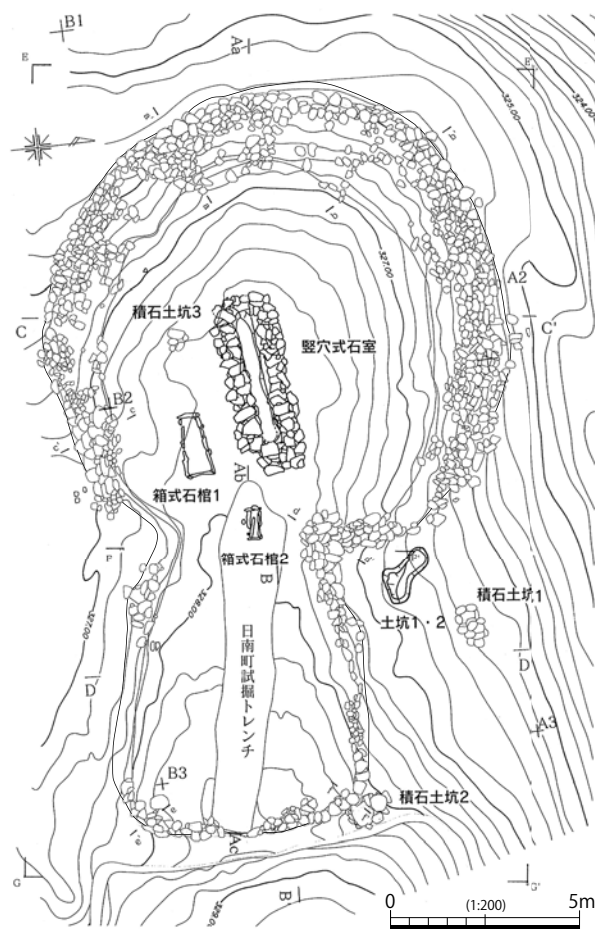


図1 霞17号墳実測図

られるが、木棺痕跡は認められなかった。掘り込みの縦断面形は中央部で最も深く、東西の小口部で浅くなる船底状を呈することから、木棺は当初から存在しない可能性も考慮できる。

竪穴式石室内からは、西側で青銅鏡1面、中央部で土師器高坏1点、東側で刀剣、鉄鏃などが出土した。鉄鏃1点と勾玉4点はやや浮いた状態で出土している。石室内法幅は西側が広いことから、西頭位と考えられる。

鏡は、径8.5cmの小型内行花文鏡である（図3-3）。文様は非常に摩滅が進んでいるため、不明な点も多いが、内区に7弧文が施されていると考えられる。

勾玉は、翡翠製3点とガラス製と考えられるもの1点がある。翡翠製勾玉（図3-5～7）は、長さ2.2cmのものは両面穿孔だが、残りは1.5cmほどで片面穿孔である。白色部分が多く、不透明なものもあるが、透明感のある緑色を呈する部分を残すものもある。ガラス製と考えられるものは（図3-8）、色調がコバルトブルーを呈し、長さ1.8cmを測る。片面穿孔のようである。

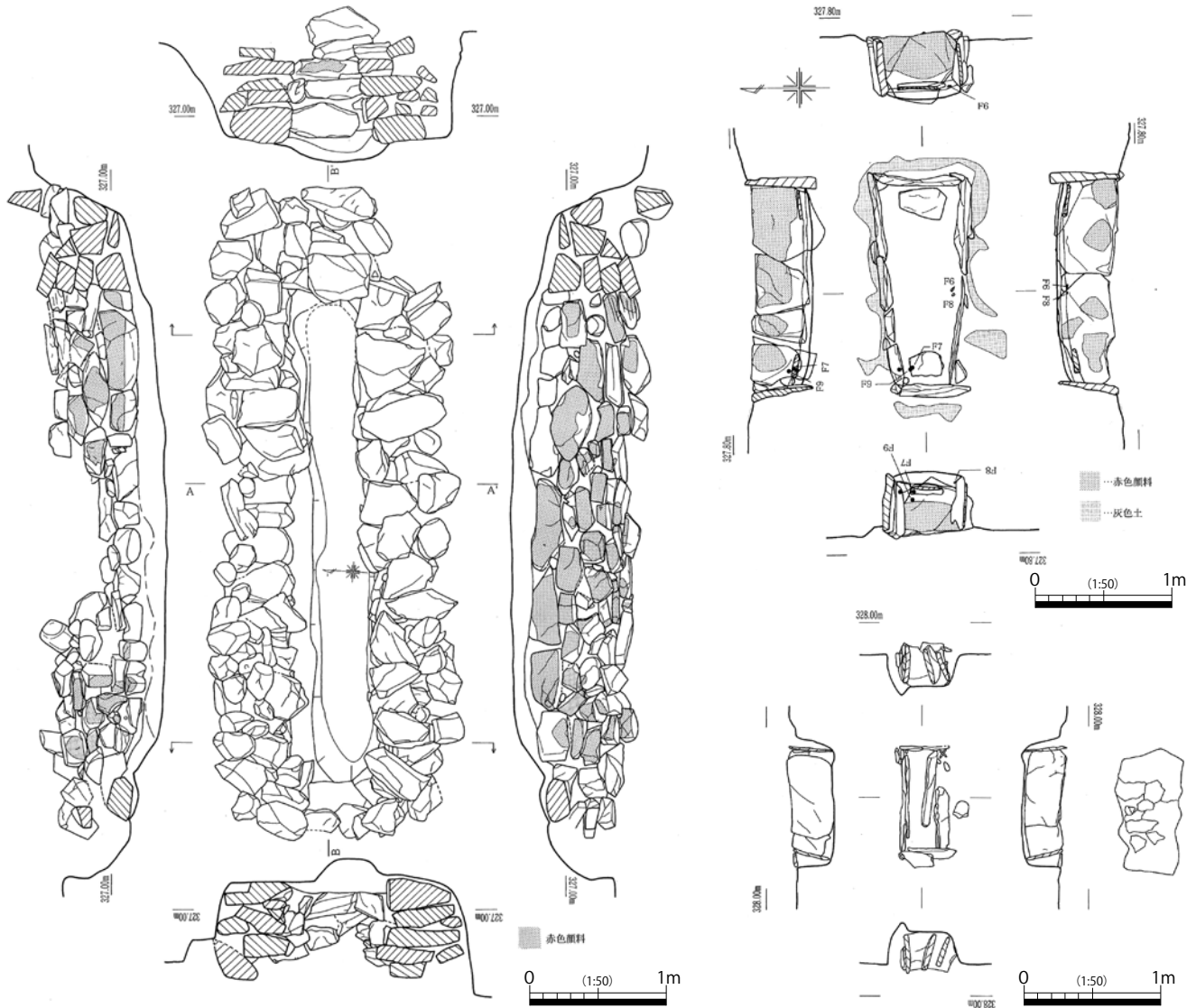


図2 霞17号墳の埋葬施設

直刀は、全長70.3cm、茎長12.0cmを測る（図3-1）。関は小さな直角関で、刀身には木質が付着することから鞘や柄などの刀装具が伴ったと考えられる。一方、鉄剣は、全長60.3cm、茎長9.2cmを測る長剣であるが（図3-2）、木質の付着が観察できないことから、装具が伴わなかった可能性がある。

鉄鏃は2点あり（図3-9、10）、1点は頸部に捻りを加えた全長9.6cmの短頸鏃であり、中期前半に位置付けられる（文献1）。もう1点も同型式になる可能性があるが、残存するのは鏃身部のみである。もう1点の鉄器は、刀子とも考えるが、よくわからない（図3-11）。

土師器高坏は、坏部だけで出土した。径11.8cm、高さ4.6cmの碗形を呈する（図3-4）。坏部は型押し成形を行なっているようで、外面に放射状のひび割れが残る。

中空の脚上部に坏底部となる粘土塊を落とし込むβ技法で（文献2）、前期後半～中期前半に位置付けられる。

後円部の箱式石棺1は、内法長さ1.9m、幅1.0m、高さ0.5mを測り、石材表面には赤色顔料（ベンガラ）が塗布されていた（図2-右上）主軸は東西方向であり、東側を幅広く作るが、東西両小口に石枕が存在し、2体埋葬が考えられる。東側枕付近からは何も出土しなかったが、西側枕周辺から、刀子片と考えられる鉄器が出土した（図3-12、14）。また、棺内南壁沿で他の刀子も見つかった（図3-13、15）。なお、出土位置は不明ながら、翡翠製勾玉1点も出土している（図3-16）。

くびれ部上で見つかった箱式石棺2は、内法長さ0.9m、幅0.5m、高さ0.3mを測る小型の石棺である。人骨などは見つからなかったが、大きさから小児埋葬と推測される。棺内から刀子1点が出土した（図3-17）。

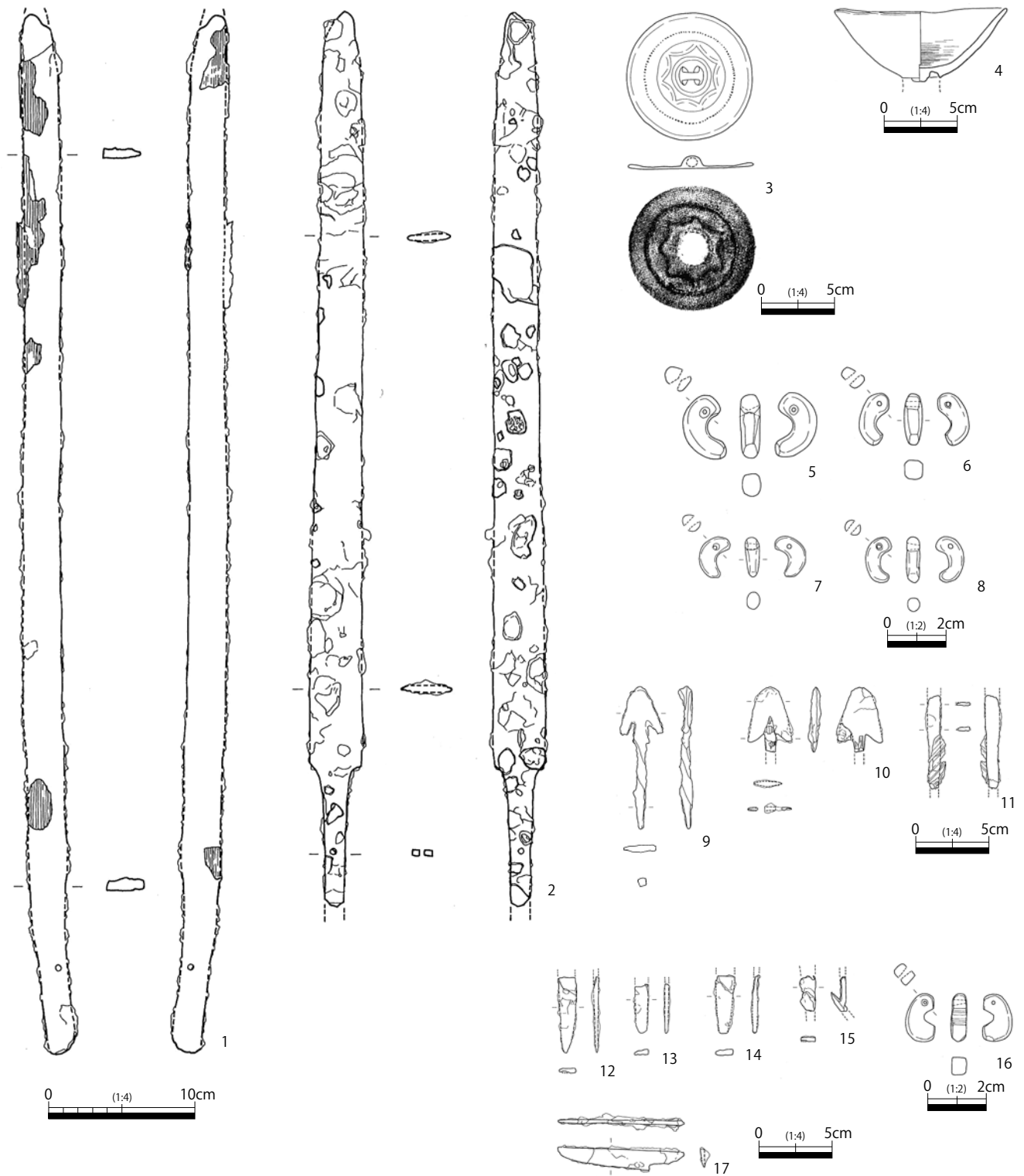


図3 霞17号墳出土遺物

特徴と意義

霞17号墳は、日野川上流部にあつて県内では最南端に近い前方後円墳である。霞17号墳が立地する日野川上流のこの地域は、庄原方面、新見方面を通じて山陽側とつながる重要な交通路に面しており、古墳時代以前、以後にも物流のみならず、人びとの交流の拠点となつた

と考えられる。竪穴式石室出土の振りのある短頸鍬は、まさに首長間の交流によつてもたらされたと考えられているものである(文献1)。また、これまでに判明している因幡・伯耆地域の前期段階の前方後円墳は、葺石や竪穴式石室といった、畿内をはじめとする先進地域の前方後円墳が初めから備えている諸要素が欠けているもの

が多い。その点で霞17号墳は、小規模で埴輪をもたないとはいえ、山陰において葺石と竪穴式石室を具備した前方後円墳の先駆けとも言える存在で、その被葬者は、古墳時代中期前葉（5世紀前葉）に山陰・山陽を結ぶ交流の結節点になった人物が想定できよう。

現状と遺物

古墳は調査後に町内農業担い手研修施設イチイ荘前に移築保存された。出土遺物は、日南町郷土資料館で保管されている。

文献

1. 鈴木一有 2002 「捩りと渦巻き」『考古学論文集 東海の路：平野吾郎先生還暦記念』「東海の路」刊行会 pp. 261-282
2. 松山智弘 「出雲における古墳時代前半期の土器の様相―大東式の再検討―」『島根考古学会誌』第8集 pp. 1-29
3. 濱 隆造 2001 「霞17号墳の調査」『霞遺跡群』鳥取県教育文化財団 pp. 150-180

（高田 健一）